

危機対応について

事故が起きたときこそ！

2019.03.11

No.57

校長 渡邊 幸二

金曜日、子どもに係るある事故が発生しました。子どもには非はないのですが、学校側の対応・システムについての不備が露見した事案でした。事故の概要は

- ◇ ある学童保育所の送迎車が遅れるとの連絡が学校に入る。
- ◇ 電話対応者が校内にいるはずの当該児童に伝えようとしたところ、校内にはいなかった。
- ◇ 一人で歩いてどこかに行ったと思い込み、多くの教員が学区内を捜索に当たったが見つからなかった。
- ◇ 実は、時間になっても迎えが来ないと感じた児童が校門を少し出たところ(?)で、ちょうど送迎車が来てそれに乗り込み、無事学童に到着していた。

というものです。

今回は誘拐や命に係る大事には至りませんでした。「まずはよかったね。」と思ってしまえばそれまでです。しかし、危機管理のトップである管理職としては、こういう事案をスルーするわけにはいきません。

今回の事故に関しては、私は以前からある不安を抱いていました。つまり、その対策を怠った私に非があるわけです。危機管理は常に「最悪を想定して！」と言われますが、何でもかんでも厳密に対応していたら、学校はきっと何もできない窮屈な場となってしまいうでしょう。ですからその見極めも必要になりますが、今回のように小さな事故が起きたときは改善すべき事案ととらえるべきだと思っています。つまり、神様がそっと教えてくれていると思うのです。



1つの重大事故の背後には29の軽微な事故があり、その背景には300の異常が存在する

というのは有名なハインリッヒの法則ですが、今回の「軽微な事故」「異常」にしっかり対応することで、将来「起こるべくして起きた!」と言われないように、未然に事故を防がなければなりません。これが危機管理の鉄則だと思うのです。

では、どうするか?を語る前に、みなさんに今後厳密に守っていただきたいことがあります。それは「報告」と「概要の記録」です。飽海地区の先生方は案外これが苦手です(これも飽海の弱さかもしれません)。

報告の義務

今回の事故を私が把握したのは、かなり状況が進行してしまってからでした。気を利かせたM先生が私にそっと教えてくださったのでわかりました。危機対応は「初動」が肝心ですので、「あれっ!?!」と感じたら、担任に限らずどなたでも、感じた人がすぐ教

頭先生にお知らせください。一番ダメな教師は、何でも自分一人できると思い込んでいる教師です。確かにできる場合もありますが、大きな事故に発展する恐れが非常に高いと言えます。「軽微な事故」「異常」を感じたらすぐの報告をお願いいたします。これは先生方を守るために絶対に必要です。これを怠ると、最悪の場合、責任を先生ご自身にとってもらうこととなります。危機を危機と感じない、察知できない場合も同じです。いじめを見て見ぬふりをしたという場合と同じだと思ってください。

概要の記録

万が一、ケガや命に係る事故に発展した場合、教育委員会への報告の必要があります。だから「記録」を取るということではありません。その目的は、**今後事故を防ぐためには、その時の状況をできるだけ時系列で振り返ることが必要になるから**です。

大きな事故が発生した場合は特に、みんな浮き足立ってしまうので、いつどんなこと起きていたのか、後で考えてもはっきりしない、もう思い出せないということになりかねません。ですから、小さな事故と思った時でも、いつ、どんなことが、どのように、誰がかかわって、どう対応したかなどについて**常にメモを取る**ようにしておいてください。それが、後で対策を考える上で重要な資料となります。

学校へのお迎えと想定される事故

さて、今回の事故の前に私が感じていた不安というのは、**駐車場への子どもの侵入**です。前に勤めていた学校でも、毎日、特に天気の悪い日は駐車場が満杯になるほどのお迎えの車が来ていました。そんなたくさんの車が動いている中を、小さな子どもたちが車の間を縫って自分を待っている車めがけて走り出すので危なくて仕方ありませんでした。今の浜田小学校も同じ状況です。事故が起きてから、尊い命が失われてからでは遅いのです。何とかしなくてはなりません。



みなさんならどのような手を打ちますか。どうしたら子どもの安全が確保されると思いますか。みなさんからのご意見をもとに、最善の方策を保護者の方、お迎えに来る学童等の施設の方をお願いしていこうと思います。水曜日の打ち合わせまでに考えておいてください(直接ご意見を伝えていただいてもかまいません)。